

講演会要旨

1. 開催日 2014年6月27日
2. 会場 20—119講堂
3. 講演者 篠山 淳子先生
4. 演題 発達障がいを抱える人たちとのよりよい交流を目指して

ここに居られる方々は、どうしてご自分が「発達障がい」ではなかったのか、と考えたことがおありだろうか？ そのような想像をしてみることは、「障がい」を抱える人たちと接する上で、大切なことではないかと思われる。

「発達障がい」といっても、その程度はさまざまで、連続体をなしている。ほぼ1割の人には、それがあると考えられている。その人たちは、認識や思考の同時統合機能の働きが弱く、部分部分の力はあるのだが、その統合が弱いとされる。

その人たちの診断は3つ（ASD：自閉症スペクトラム障がい、ADHD：注意欠陥多動性障がい、LD：学習障がい）に分かれるが、重なる部分も多い。診断の目的は、治すことにはなく、特性を知って活かすことにある。

また、気をつけなくてはならないのは、「二次障がい」である。これは、本来の特性が原因となって家庭や学校などの環境への不適應を起こした結果生じる様々な症状、またそれに伴う自尊心の低下である。これは、人として誰にでも生じうる状態である。

そのような「障がい」を持つ人たちへの接し方の基本は、その人たちの心の世界やその文化を理解することである。それができなくては、どうしようもない。また、一人ひとりの世界が微妙に違っていることにも留意しなくてはならない。これも、どんな人についても言えることである。また、持っている能力、長所を高めるようにかかわることが肝要である。欠点や弱所を治そうとしても、なくなるものではない。

多くの場合に気をつけておくとよいのは、穏やかに話しかけることである。大きな声や早口で言ってしまうと、言われた方は何を言われているか分からず、怒られていると受け取られてしまいかねない。また、周囲が困るようなことがあったときには、本人としては相手の気持ちが分からなかったためなことかも知れないし、気持ちを抑えることができなかつたためかも知れないので、それはよくないということを穏やかにはっきりと伝えるのがよい。約束については、それを忘れていないか、直前にこちらから確認しておくともよい。また、忘れにくいように、書いておくともよい。

(文責 下田節夫)